



CQM(超短期経済予測モデル)

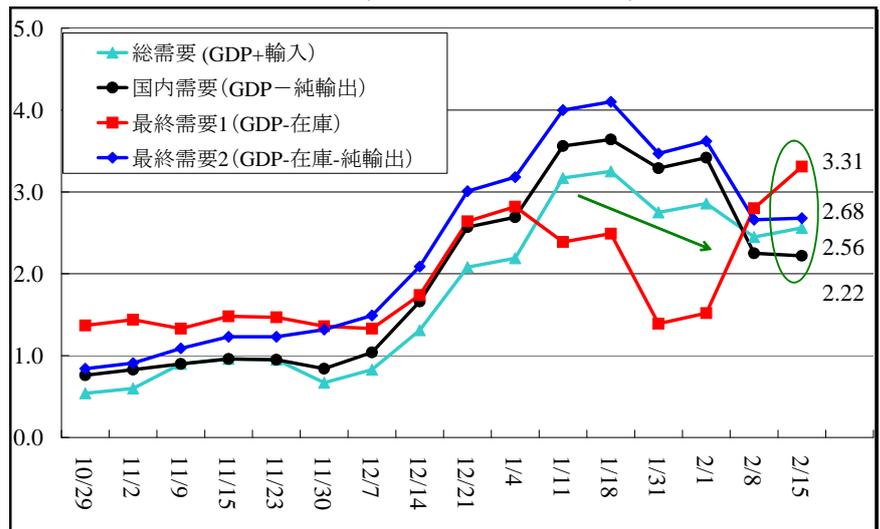
熊坂侑三 (APIR リサーチリーダー, ITエコノミーCEO)
内容に関するお問い合わせは下記まで
e-mail:kumasaka@iteconomy.com

米国経済(週次)予測(2013年2月15日)

ポイント

- ▶先週の12月の貿易統計と同じように、今週のCQMでは1月の輸出入統計がCQM予測に大きな影響を与えた。
- ▶これは、1月の輸出入統計が大きく変動した時、それが2月以降の輸出入価格のARIMA予測に大きく影響し、NIPAの輸出入価格デフレーターを過大、あるいは過小に予測する傾向があるからである。
- ▶現状の景気判断にはGDPのみでなく、図表にみるようにその他のアグリゲート指標をみるのがよい。
- ▶10-12月期(2012Q4)の経済成長率は-0.14%と全く予期せぬマイナス成長になったが、これは軍事支出の一時的なものであり、今期の景気は1月からのスローダウンにも2月中頃には歯止めがかかり、今期には3%程度の経済成長率ができると予測している。

実質アグリゲート指標成長率
2013Q1(%, 前期比年率換算)



<GDPのみならず、その他のアグリゲート指標から景気の現状を判断>

2月15日のCQM予測は12月の企業在庫、1月の連邦政府支出、小売販売、輸出入価格、鉱工業生産指数を更新した。

今週のCQMは1-3月期(2013Q1)の実質GDP伸び率を支出サイドでは3.36%から3.80%へ上方に修正し、所得サイドでは1.46%から1.93%へと上方に修正した。両サイドからの平均実質GDP伸び率は2.41%から2.86%へと0.45%上方に修正された。

12月の貿易統計がCQM予測に大きな影響を与えたように、1月の輸出入価格もCQM予測に大きな影響を与えた。労働統計局(BLS)によって発表される輸出入価格は季節調整がなされていないことから、CQMではBLS発表の輸出入価格にX12手法を適用し季節調整を施し、国民所得・生産勘定表(NIPA)の輸出入価格を推定・予測する。1月の輸出入価格の変動が大きいと、それが2月以降の輸出入価格のARIMA予測にも影響を及ぼし、NIPAの輸出入価格を過大、あるいは過小に予測する可能性がある。それ故、支出・所得両サイドからのGDP予測に大きなギャップがある時は、両サイドからの平均GDP予測に注目するのが良い。

更に、重要なのはGDPのみならず、同時に総需要、国内需要、最終需要などの予測値変化をみて、現状の景気判断をするのが好ましい。図表に見るように、景気は1月に入るとスローダウンをし始めたが、2月中頃には下げ止まり、アグリゲート指標でみた現在の経済成長率は2.2%~3.3%といえる。特に、在庫と輸出入の実績値がまだ12月までしか更新されていないことから、最終需要2の成長率をみれば、1月半ばからすでに景気は回復し始め、現在3.3%の成長率を示している。今週のCQMでは持続的景気回復の鍵を握る実質個人消費支出と実質固定資本形成の今期の伸び率をそれぞれ3.5%、4.6%と予測している。10-12月期の経済成長率が-0.14%と非常に悲観的なものになったが、これも一時的な軍事支出によるものであり、今のCQM予測からみて今期の経済成長率を3%程度と考えてよいだろう。

- ・本レポートは執筆者が情報提供を目的として作成したものであり、当研究所の見解を示すものではありません。
- ・当研究所は、本レポートの正確性、完全性を保証するものではありません。また、本レポートの無断転載を禁じます。
- ・お問い合わせ先：一般財団法人アジア太平洋研究所 contact@apir.or.jp 06-6441-0550